

20090

生分解性ポリマーを有する薬剤溶出型ステント留置後約1ヶ月での新生内膜被覆について

¹社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷横浜病院、²社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷横浜病院

和田 知沙都¹、杉村 淳¹、花岡 典代¹、芦田 和博²、新村 剛透²、吉野 利尋²、中島 啓介²、五十嵐 巖²、眞壁 英仁²、河合 慧²、山田 亘²

【目的】血管壁側のみを生分解性ポリマーを有する薬剤溶出型冠動脈ステントは、内皮化を早期実現しステント血栓症のリスク低減の可能性が示唆されている。早期の新生内膜の増殖度合を知ることを目的に、ステント留置1ヶ月後にOCTにて観察した。【方法】Staged PCI 予定の多枝病変症例に対する初回PCIにおいて、Ultimaster (n=8) もしくはSynergy (n=6) を留置し、1ヶ月での残存病変に対するPCI時に、初回PCIで留置されたステントをOCTにて観察した。各ステント1mmスライス毎の新生内膜厚(NIT)、新生内膜被覆率(%NIC) (全周性に20 μ m以上の被膜のみられるもの)をオーバーラップ領域と分岐部を除き測定した。【結果】Ultimaster、SynergyのNIT(μ m)は74と59、%NICは83と86であった。【考察】血管径やステントの圧着度によりNITに違いはあるが、双方とも%NICに大きな違いはなく、良好だったことから、早期の全周性新生内膜増殖に寄与していると考えられる。【結語】ストラットが薄く、血管壁側にのみポリマーを持つ特徴により、ステント留置後1ヶ月で良好な%NICが得られた。このことにより、早期DAPTを中止できるDESとしての可能性が示唆された。